

# Ocean Breeze

オーシャンブリーズ

「Silhouette」  
(共同利用・共同研究推進室 戸田 亮二)



「*Oncorhynchus taikaisensis*」  
(海洋生物資源部門 戸田 達也)

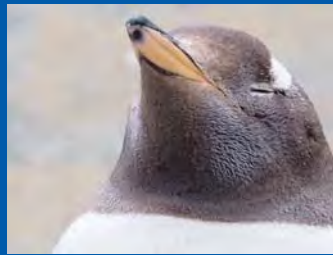


「The clouds' language」  
(気候モデリング研究部門 福田 ひかり)

「採餌中のアオウミガメ」  
(海洋生命科学部門 河合 萌)



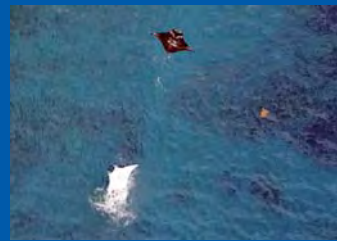
「すんっ」  
(海洋生命科学部門 松田 康佑)



「2匹のマンタ  
とウミガメ」  
(海洋生命科学部門 河合 萌)



「Reflected in Natural Mirror」  
(海洋生態系科学部門 菅井 洋太)



「調査開始！」  
(海洋生物資源部門 細野 将汰)



「環」  
(海洋生物資源部門 樋口 富彦)



「Okamoto Pier.」  
(海洋物理学部門 LIU Haoyan)



「Dive」  
海洋底科学部門 照井 孝之介)

「2023年度AORI写真コンテスト」受賞作品  
▶詳細はP.15をご覧ください

## 特集1 亜熱帯・Kuroshio研究教育拠点の形成と展開

—亜熱帯化する日本のベースライン評価と生物圏・人間圏の研究—

## 特集2 大槌沿岸センター開設50周年 —記念式典開催と記念誌編纂—

トピックス | ArcWatchプロジェクトへの参加報告 北極海、海氷下の熱流動の実態調査：渦相関手法と自動観測パイを用いた新技術の開発

報告 | 高藪 縁 教授が日本気象学会2023年度藤原賞および  
アメリカ気象学会(AMS)ジョアンナ・シンプソン熱帯気象研究賞を受賞

空と海の文学 第13回 | ドリトル先生航海記

研究航海レポート

著者による新刊紹介 |

Radionuclides in the Marine Environment:  
Scientific view on the Fukushima Dai-ichi Nuclear Power Station Accident by 7 oceanographers

地球規模の気象学 大気の大循環から理解する新しい気象学

研究人生よもやま話③ | 導きの手紙

イベントレポート

受賞／人事異動一覧

# 亜熱帯・Kuroshio研究教育拠点の 形成と展開

東京大学教育研究事業：2021年度～2025年度

## —亜熱帯化する日本のベースライン評価と生物圏・人間圏の研究—

大気海洋研究所：横山 祐典(代表)、早川 淳、平林 頌子、医科学研究所：真下 知士、横田 伸一、  
大学院人文社会系研究科：西村 明、大学院情報学環：矢口 祐人、ほか

奄美大島にある東京大学医科学研究所奄美病害動物研究施設を利用した新たな研究教育プロジェクト「亜熱帯・Kuroshio研究教育拠点の形成と展開：亜熱帯化する日本の環境ベースライン評価と生物圏・人間圏の研究」が2021年度からスタートしました。当初の計画の中間地点を過ぎ、プロジェクトが現在どのような状況にあるのか、また、奄美の研究拠点がどのように整備されつつあるのかを代表の横山教授に伺います。

プロジェクト名で“黒潮”を“Kuroshio”と表記されているのは、プロジェクトのどのような側面を表していますか？ また、“Kuroshio”は日本の亜熱帯化にどう影響しているのでしょうか？

黒潮は日本のみならず太平洋全体の熱の再分配に関連した重要な海流です。今回のプロジェクトでは、東京大学内の部局間の連携や大

気海洋研究所の亜熱帯研究拠点の形成という観点だけではなく、将来的にアジアや世界との連携も意識したという意味でKuroshioと表しています。温暖化が進行すると黒潮を含む北太平洋の海洋循環に大きな影響があり、黒潮の流量の変化によっては日本近海の水温が上昇し魚類など水産資源の分布にも変化が及ぶと考えられています。さらには大雨や暴風などの発生との関わりも議論されているところです。黒潮が輸送する熱が大きいため、その変化が日本へもたらす影響も大きいのです。

“亜熱帯・Kuroshio”プロジェクトはスタートから3年になろうとしています。プロジェクトは1年ごとに段階的な課題、目標が設定されているのではと推察しますが、この3年でどのようなことが為され、現在どのような課題に取り組まれていますか？



大海研×与論高校×大槌高校 サイエンスキャンプ2期生の活動とシンポジウムでの報告の様子  
1期生のサイエンスキャンプの内容は、日本地球惑星科学連合2023年大会にて発表。また同じく1期生の中からは、この活動がきっかけで学びを深め、複数名が大学に推薦合格を果たす。



1年目である2021年度前半は、まだコロナ禍で移動が制限され、特に離島である奄美群島への渡航は極めて限定的に実施せざるを得ませんでした。ようやく年度後半になってから、自主PCR検査をして渡航し、2年目への準備を進めたことを覚えています。その中でまず実施したのが、地元の声を聴くことでした。鹿児島県の大島支庁長や独立行政法人奄美群島振興開発基金の理事長との面談から開始し、奄美群島の12市町村長全ての首長の皆様を直接訪問し、お話をさせていただきました。当初から、三陸において成功している“海と希望の学校”を奄美に展開したいと考えていたため、高校の探究学習をサポートすることを提案しました。まず奄美大島の大島高校、医科研施設近隣の古仁屋(こにや)高校、そして奄美群島で最も南にある与論島の与論高校との取り組みからスタートすることにしました。特に与論高校は校長先生をはじめとした高校側の体制、与論町や地元NPOなど民間のサポート体制が整っていたこともあり、2022年度の5月から開始することができました。与論高校に初めてお話に行ったのが同年の4月でしたので驚くべき短時間で始動でした。2022年の8月には与論高生を柏キャンパスに呼んで実施したサイエンスキャンプ

の1期生を迎えました。さらにこの年は、実質のプロジェクト開始の年度でもありましたので、12月に奄美市でキックオフシンポジウムを行いました。

#### 奄美の研究拠点づくりは今、どのような段階にありますか？ 現地でラボが稼働する予定はありますか？

拠点作りという意味では、現在医科学研究所の奄美病害動物研究施設の一室をお借りして、オフィスにしたという状況です。人工衛星の温暖化ガス観測に関連した地上観測装置を施設の屋上に設置し、観測を開始しています(気候系・今須先生の研究)。大島海峡のサンゴ礁の定期的な観察(リーフチェック)や、海水や生物試料採取に対応した冷蔵庫の設置などを行い、徐々にですが現地で設備をそろえている段階です。できれば建物を含め、研究者が常駐できるようなラボを稼働させたいと考えています。ソフトの方では、おかげさまで多くのネットワークができてきて、当初の目的であった奄美群島全体と連携した取り組みの体制が整ってきました。



自然保護協会や瀬戸内町の皆さんとサンゴ礁の状態をチェックする活動(リーフチェック)

さらには地元の鹿児島大学の国際島嶼教育研究センターや九州大学とは、共同でのシンポジウム開催や共同研究などを通じて連携が進んでいるといえます。亜熱帯の研究拠点で先行している琉球大学の熱帯生物圏研究センター(熱生研)とは、共同利用のプロポーザルに関して、熱生研施設を含む亜熱帯研究推進の特別枠を設置して相互乗り入れを加速する体制作りを進めています。このように複数大学の連携で亜熱帯の研究や教育の推進を進める体制ができてきました。

#### プロジェクト開始から3年が過ぎ、見えてきた課題や困難がありますか？ 2024～2025年度はプロジェクトの結実に向けて、どんなことに注力していきますか？

地元との連携や協働をさらに進めるためには、やはり現地の拠点にスタッフが常駐できるような環境があるといいと感じます。奄美群島には奄美市の名瀬に鹿児島大学の国際島嶼教育研究センターの施設

がありますが、瀬戸内町にある医科研の施設とは、距離的な問題から思ったほど連携が取れていないのが現状です。そこで、2023年度に2つの施設の連携を進めて全国の大学や研究機関の活動をサポートするハブとなるような連携計画を文科省に提出しましたが、残念ながら採択には至りませんでした。しかし、この準備段階で、関連の大学との対話が生まれ、更なる連携の進化について認識を深めることができました。また、大島高校を中心に進めている、奄美群島高校探究コンソーシアムに大気海洋研究所として参画することになったことで、奄美群島の高校の横のつながりの強化と探究学習の効率的なサポート体制を作ることができました。同時期に始まった「市民参加による海洋総合知創出手法構築プロジェクト(総合知プロジェクト：代表青山教授)」とも連携して産学官民協働での取り組みを進める予定で、2023年11月のシンポジウムはこの総合知プロジェクトのキックオフも兼ねて開催しました。

# 亜熱帯・Kuroshio研究教育拠点の形成と展開

—亜熱帯化する日本のベースライン評価と生物圏・人間圏の研究—



2023年11月に奄美市で開催されたシンポジウムにて。  
 前列左から2人目と3人目：矢口祐人 副学長、堤伸浩 副学長  
 左から5人目：安部真理子 日本自然保護協会保護・教育部主任、中央：兵藤所長、  
 兵藤所長右隣：西村明 大学院人文社会系研究科准教授、  
 右端：青山潤 附属国際・地域連携研究センター長、右から2人目：齊藤宏明 所長補佐、右から3人目：筆者



シンポジウム期間中に開催された奄美関連の行政や民間の方々との意見交換会

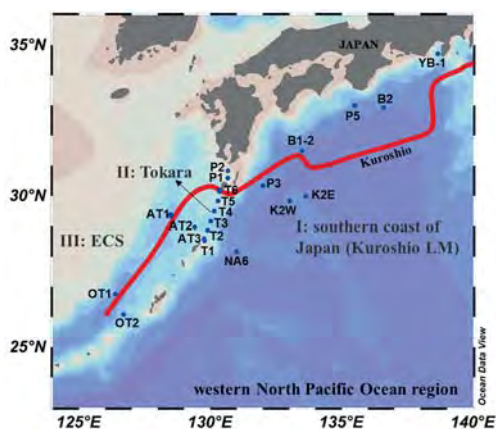


シンポジウム後に開催された普及講演会

研究に関しても、白鳳丸慣熟航海でサンプリングを行った黒潮の海水の分析結果が出揃ってきて、複数の学術論文として出版されはじめています。また、卒論生に取り組んでもらった喜界島の地下水に関する研究も、先日国際誌に掲載され、その結果が注目を浴びています。さらに国際センターの齊藤教授と国連のユネスコ政府間海洋学委員会(UNESCO/IOC)の西太平洋に関する政府間地域小委員会(WESTPAC)のなかの国際観測プロジェクトCooperative Study of the Kuroshio and Adjacent Regions(CSK-2)に提案を行い、それが認められたため、本プロジェクトが「国連海洋科学の10年」に貢献する正式な研究活動としても進めていくことになりました。



奄美群島をフィールドとした研究の開始  
 (海底地形、地下水、白鳳丸を使った沖合調査)



今後、大気海洋研究所の多くの研究者の方々に是非関わっていただきたいです。そのためには、奄美拠点準備室の専任の教員のお二人(早川准教授・平林講師)や協力いただいている先端分析研究推進室の宮入特任助教とともに、皆さんが参画しやすい環境を提供できるような活動を展開していこうと思っています。

# 大槌沿岸センター開設50周年

## — 記念式典開催と記念誌編纂 —

岩手県上閉伊(かみへい)郡大槌町にある大気海洋研究所の大槌沿岸センター。

所在地の地名から「赤浜の東大」と呼ばれる研究拠点が、このほど開設50周年を迎え、

2023年11月17日に記念式典と祝賀会が行われました。また、この機に大槌沿岸センター開設50年史が編纂されました。

今回の特集では、記念式典と祝賀会の様子、50年史の掲載内容について、

イベント開催や冊子編集に携わった、地域連携研究部門の福田秀樹 准教授に伺いました。



大槌のシンボル、蓬莱島(ひょうたん島)と、大槌湾や船越湾での調査に使用される調査船「弥生」

大槌沿岸センターの「いま・むかし」については、以下の記事をご覧ください。

▼別冊Ocean Breeze『うみそら』No.5

特集・大槌沿岸センター設立50周年記念～座談会～  
「赤浜の東大」今昔物語

[https://www.aori.u-tokyo.ac.jp/newsletter/files/umisora\\_05.pdf](https://www.aori.u-tokyo.ac.jp/newsletter/files/umisora_05.pdf)



## 〔 歴代のセンター関係者が一堂に会した記念式典、祝賀会 〕

記念式典、祝賀会にはどのような方々が参加されましたか？

来賓として、文部科学省、海上保安庁釜石海上保安部の方々や、自治体関連で岩手県、釜石市、大槌町の方々、研究機関では海洋研究開発機構(JAMSTEC)、水産研究・教育機構、岩手大学の皆さま、海と希望の学校の関係で大槌町立大槌学園(義務教育学校)、大槌高等学校、宮古市立重茂(おもえ)中学校の皆さまにお越しいただきました。

また、東大関係者として理事や部局長、センターOB、AORI関係者が参加しました。個人的にはOBの懐かしい方々と久しぶりに会うことができ感慨深かったです。



記念式典、祝賀会の会場となった大槌町文化交流センター「おしゃっち」



当日は荒天だったが、式典が始まる頃には空に虹が(左端の建物は会場の「おしゃっち」)



記念式典の様子



**祝辞の中で、特に印象深かったことはありますか？**

個人的に印象に残ったお言葉としては、センターを利用されたこともあるJAMSTECの大和理事長から、当時から船舶の整備が行き届いていて、スタッフの技術力の高さに驚いたというお言葉をいただきましたが、私自身も学生時代、センターを利用し始めた当時に感じたことでしたので、今後も残していくべき良い伝統なのだと思って感じました。

文部科学省研究振興局 大学研究基盤整備課の柳澤課長、達増知事(代読)、釜石市

の野田市長(当時)、大槌町の平野町長からは、近年の地域との結びつきに対する感謝や期待の言葉をいただいたほか、普段、率直なお意見をおっしゃることが多い大槌町議会の小松議長から「何も言うことはありません」とのお言葉をいただき、震災以降のセンターの活動方針の反響の大きさも改めて感じました。

**「赤浜の東大」と呼ばれるように、大槌沿岸センターの50年は大槌町と積み上げてきた歴史でもあるように思います。このイベント中、大槌町とセンターのつながりを実感した瞬間がありましたか？**

故人となられた寺崎元所長などからは着任当時に地域の運動会へ参加したことを個人的に伺ったことがあります。そういった個人的な交流から、寺崎元所長が力を入られた、地域の方に楽しんでもらえる施設一般公開の開催などを経て50年が経ち、祝辞として地域の方々からいただいた、期待や感謝の言葉に表れた関係へと変化してきたことが印象深かったことです。今回、寺崎元所長を知る事務のOBの方々と話している時に感じました。



祝賀会で挨拶する兵藤所長



大竹二雄 元センター長による乾杯挨拶



祝賀会会場での歓談風景



大気海洋研究所1階の「お魚倶楽部はま」が会場に特別出店

あとは赤浜の公民館(大槌町文化交流センター「おしゃっち」)で記念式典と祝賀会を開催できたことでしょうか。地域の運動会への参加など、地域とは個人的なお付き合いがあったと思うのですが、組織として地域の公民館で受け入れていただいたことも、個人的には感慨深いものがあります。センター30年史なども公民館の本棚に置いていただいています。



余興として披露された陸中弁天虎舞(とらまい)



青山潤センター長による閉会の辞

## 「記念誌にぎゅっと詰めた大槌沿岸センターの50年」

大槌沿岸センター50年史は一般の方にお配りするものではありませんが、この一冊はどのような方針で制作されましたか？

センターは設立30周年の際に30年史（『東京大学海洋研究所 国際沿岸海洋研究センター（旧大槌臨海研究センター）30年の歩み 1973～2003』）を発行していますので、初期の30年間についてはこれを参照していただくとして、50年史では31年目から50年目の活動を特に取り上げることとしました。一方、センターには赤浜に建設された経緯の記録がほとんど残っていませんが、この20年間には東日本大震災の被災により失われた記録や、収集されていない当事者の記憶というものもありましたので、それらが失われることが無いように、復元や収集にも努めました。

また、30年史は学内だけでなく、町内の公民館をはじめ、図書館などの書棚にも置か

れています。記録を残すことが第一の目的ではありますが、これらの公共施設において一般の方の目に触れることも意識し、多くの方にセンターの活動内容を広く知ってもらえるよう、パラパラとめくった時に「読んでみようかな」と思ってもらえるものにするのを意識しました。

記念誌には『Ocean Breeze』掲載のセンターに関連する記事のすべてと『学内広報』の連載バックナンバーが全部載っており、まとめてこれだけ多くの記事を目にすると、センターが経験してきた悲喜交交に圧倒されました。広報誌の記事をすべて収録するというアイデアはどこから生まれましたか？

この連載記事を集めること自体は、新センターの新棟完成記念式典（2018年7月）に合わせて発刊された『国際沿岸海洋研究セン

ター研究報告 第36号』でも行っており、当時も好評でした。あの時も震災以降の出来事の年表を作成しましたが、記載事項の事実確認を目的として、過去の掲載記事を読み込むことになりました。当初は参考資料として読んでおりましたが、各人が工夫を凝らして楽しく書いているだけでなく、当時の町やセンターの空気感が随所に感じられるものとなっており、年表に記載するような、抽出された出来事だけを記載するのはもったいないと感じ、年表とは別に記事をそのまま掲載することにしました。今回の50年史では、先ほどお伝えしたように、記録の収集というだけでなく、「たまたま手に取った一般の方にも興味を持ってもらう」ことを目指しましたので、「きれいなレイアウト」、「目に留まる見出しや写真」、「多様な話題」に加え、各記事執筆者の「読む者を楽しませる気持ち」も活用できると考えました。



2018年に完成した新センター



発行を無事に終えて、どのようなことを感じましたか？

少ない人員に対して、少なからぬ労力が求められる難事業でしたので、時に業務範囲を超えてご協力いただいた関係者の皆さまに対する感謝の気持ちでいっぱいでした。とにかく間に合うのか、不安でしたね…。特にセンター関係者の在職期間などの人事情報を収集・確認していただいた総務チームの皆さん、デザインや内容の確認に多大な労力を割っていただいた峰岸さん（地域連携研究

部門 峰岸有紀 准教授）、写真を探していただいた渡部さん（共同利用・共同研究推進センター 渡部寿賀子 特任専門職員）や広報戦略室には感謝したいです。この記念誌に

よって、センターを取り巻く様々な出来事と、センターに関わった方々の様々な想いが、広く、末永く引き継がれていくと良いなと思いました。

▼「海と希望の学校 in 三陸」公式X (@umitokibo)  
<https://twitter.com/umitokibo>



▼『学内広報』- 連載「海と希望の学校 in 三陸」  
<https://www.u-tokyo.ac.jp/ja/society/aid/sanriku.html>



# ArcWatchプロジェクトへの参加報告

## 北極海、海水下の熱流動の実態調査：渦相関手法と自動観測ブイを用いた新技術の開発

川口 悠介 海洋物理学部門 助教

2023年8月1日から10月1日までの期間、アルフレッド・ウェゲナー海洋研究所の砕氷船「ポーラーシュテルン号」に乗船し、北極海の多年氷域、特に北極点を含むユーラシア海盆域で海水と海洋の物理観測を実施しました。この調査は、2019年10月から2020年10月まで北極海の氷域に砕氷船を係留させ、海水域の調査を行った「MOSAic」プロジェクト(下記参考情報参照)の続編と位置づけられています。MOSAicプロジェクトは、氷盤が一年を通じて経験する環境の変化をラグランジュ的な視点で調査することを目的としていました(下記プレスリリース参照)。一方、「ArcWatch」では、ユーラシア海盆域における多年氷の分布と広がり把握することを目的とし、人工衛星、ドローン、ヘリによる先行調査を実施し、9つの氷上ステーションで2-3日間の調査を行いました(図1)。

■ Ocean Breeze 第33号 p.02-04

「特集：北極海の気候変動の実態を捉える！砕氷船閉じ込め観測プロジェクト、MOSAic」  
[https://www.aori.u-tokyo.ac.jp/newsletter/2019/files/ocean\\_breeze033.pdf](https://www.aori.u-tokyo.ac.jp/newsletter/2019/files/ocean_breeze033.pdf)



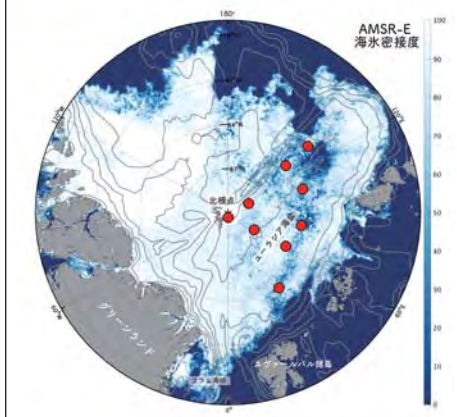
■ プレスリリース(2022年8月23日)

「北極海の海水減少の真相に迫る！一北極点、海水直下の熱の動きを徹底的に調査」  
<https://www.aori.u-tokyo.ac.jp/research/news/2022/20220823.html>



図1

海水に横付けするポーラーシュテルン号(写真)と海水ステーションの位置(図)。地図上の白い領域は海水域、赤い点が観測点。



熱フラックスに関する自動観測装置(CrioTeC：写真)。水の漂流速度(緑)や気温(黒)、水温(コンター)を自動で取得し、衛星通信でデータを送信する。水温のプロファイルから、融解時期(8月)に海水が海水に比べて温かく、結氷期以降(9月中旬)は海水が海水よりも低温であることがわかる。

図3

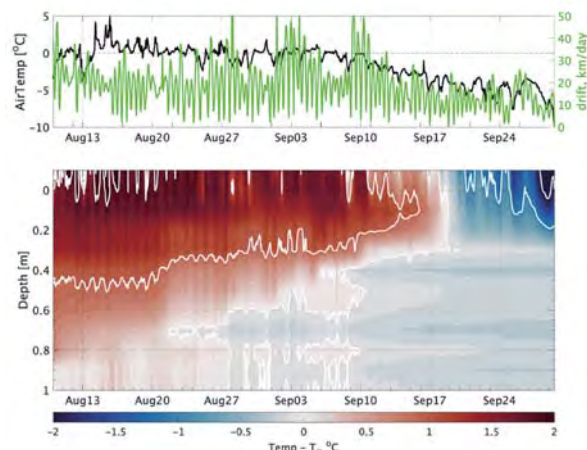


図2 渦相関手法による熱フラックスの調査風景。海水の穴を通して計測器を水下に吊るし、三脚を用いて固定する。

築し、開発中の自律式の観測装置(CrioTeCブイ)に応用することで、無人で海水下の熱フラックス観測を行う取り組みを進めています(図3)。今年度の観測では、CrioTeCのパイロット機をスヴァールバル諸島の北東の氷に設置し、約半年間の自動観測に成功しました。将来的には、渦相関と無人観測を組み合わせた観測手法を、北極海だけでなく、南極海やオホーツク海などの海水変動の理解にも応用していく予定です。



## 高萩 縁 教授が日本気象学会2023年度藤原賞 およびアメリカ気象学会 (AMS) ジョアンナ・シン普森熱帯気象研究賞を受賞

高萩縁教授が、2023年度の日本気象学会藤原賞、そしてアメリカ気象学会(AMS)のジョアンナ・シン普森熱帯気象研究賞を受賞されました。藤原賞は日本の気象学及び気象技術の発展・向上に寄与した者に対する顕彰で、後年ノーベル賞を受賞される真鍋淑郎先生(1966年度)、気候システム研究センターの初代センター長である松野先生(1992年度)をはじめ、錚々たるメンバーが歴代受賞者として名を連ねています。ジョアンナ・シン普森賞は、熱帯気象学における顕著な貢献をした研究者に贈られる賞で、気象学分野で初の女性博士号取得者の名を冠しています。

今回の受賞は、謎に満ちた熱帯の降水システムへの理解を深める礎となった数多くの研究成果とともに、その鍵となった一連の衛星観測ミッションを牽引した功績を讃えたものです。高萩先生は、理論の確立が遅れていた熱帯気象の分野において、松野

先生の赤道波に関する理論が観測データの時空間スペクトル分析から確認できることを世界で初めて示すなど、今日に続く熱帯気象学の発展を支える重要な研究成果を送り出してきた世界的に有名な先駆者の1人ですから、まさに受賞すべき方が受賞したと言えるでしょう。

いずれも大変な権威のある賞であり、私は

高萩先生の教え子の1人として鼻が高い一方で、研究者としてはなかなか影を踏むことさえも難しく、途方にくれる思いでもあります。

先生のご受賞を心よりお祝い申し上げますとともに、人生の新たなフェーズに入られての益々の公私にわたるご活躍と楽しい毎日を祈念いたします。

(気候モデリング研究部門 宮川 知己)

**日本気象学会2023年度 藤原賞 授賞業績：**  
熱帯・中緯度域の雲降水システムの大規模な組織化に関する先駆的研究ならびに衛星気象学・気候学への貢献  
**AMS (American Meteorological Society) THE JOANNE SIMPSON TROPICAL METEOROLOGY RESEARCH AWARD 授賞理由：**  
For innovative use of satellite observations and international leadership in establishing key tropical precipitation satellite missions to advance understanding of tropical precipitation variability



日本気象学会授賞式にて(右から3人目)



アメリカ気象学会 (AMS) 授賞式にて



第13回

### ドリトル先生航海記

ヒュー・ロフティング(著) 福岡伸一(訳)  
文庫判・464ページ  
2019年6月・新潮社  
ISBN : 978-4-10-240121-7

本所の河村知彦さんが、なぜ研究者になったのかを問われて、「ドリトル先生になりたくて」と答えている。私はと言えば、読書が嫌いだったうえ、物心ついてからは、動物の言葉が話せる博物学者という設定が胡散臭くて読む機会を逸してしまった。今回、航海記ということで読んでみると、なるほど、大変楽しい良い作品であった。ロフティングは10作以上のドリトルシリーズを出版しているが、本作は2作目でドリトル先生の助手のスタピンズが一人称で語る作風が確立した作品である。ドリトル先生とスタピンズの出会ってから、彼らと参謀役のオウム、ポリネシアら動物たちとの航海、ブラジルの沖に浮かぶクモサル島での伝説の博物学者ロング・アローの救出、野蛮な部族との戦闘と民主的・近代的国家の樹立と王様として統治、最後は、巨大な透明な殻をもつウミカタツムリの殻に入り英国の故郷バドラーへの帰還までが描かれている。子供たちへ読み聞かせるために書かれた物語であるため、章立ては細かく展開は速い。次の展開が楽しみでついつい読み急いでしまう。また子供向けということで、非常にモラリティックな内容であり、人種、年齢、職業にわけ隔てなくフェアにリスペクトをもって接する態度であるとか、動物を檻や水槽に閉じ込めることへの反感であるとかは、100年たった今読んでも違和感を覚えない。また、大きな楽しみは多くの生物が登場し活躍することであるが、その生物の特徴が非常によくとらえられている。オウムやイルカは頭が良く、犬は忠誠心が強く、貝やウニはほとんど言葉を持たない。物語の展開とは関係ないのだが、食事に関する記述

## 空と海の文学

は非常に魅力的で印象に残った。一方、航海記としての現実味は薄く、帆船であることは分かるが貝採りのジョーから買ったことになっているので、せいぜい数人乗りのヨット程度かと思ったら、外洋航海に堪え4人の密航者が隠れられる大きさでもある。ドリトル先生、スタピンズ、バンボ王子が8時間交代で舵をとるが、この時代の帆船は一人では操船できない。ドリトル先生も航海の達人ではないが、とにかく、ドリトル先生と一緒に、すべてはうまく行きかつ楽しい旅になるという設定なのだ。私も「ドリトル先生になりたい」。

もう一つの違和感は、暴力や戦争を否定しながらも、野蛮な部族が攻めてくるとドリトル先生らは果敢に先頭に立ち戦い、野蛮な部族を打ち負かし、文明的な法治国家を樹立する。文明化を必然ととらえ、未開=不幸と考えることは、今の私には違和感がある。この物語の時代(1830年くらい)から書かれた時代(1922年)までは、英国の植民地が最大規模を迎えた時代であり、近代的な統治と文明が、植民地と宗主国双方にとって富と幸福をもたらすと考えたのは当時の英国の時代的雰囲気だったと考えられる。ちなみに、ロフティングは米国の作家ととらえられているが、欧州の戦火を逃れるために米国に渡ったのが1919年なので、本作の頃は英国人としての意識が強かったと考えられる。また、クモサル島からの脱出と帰還を熱望するポリネシアらの思いは、ロフティングの英国への郷愁を代弁しているように思えてならない。

今回、たまたま手に取ったものが福岡伸一による新訳であった。それまで流通していたのは昭和の文豪井伏鱒二による翻訳である。いつか両者を読み比べてみよう。小学生の時に、ドリトルシリーズを誰かが勧めてくれたら、読書に関して生物学に関して、もう少しまともになっていたのではないかと思う。

(津田 敦)

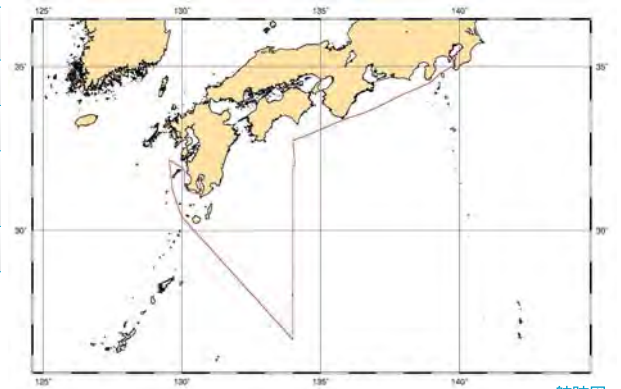
## 新青丸 KS-23-11次研究航海

観測海域 四国沖黒潮域、鹿児島西方沖

航海期間 2023年7月17日～7月28日

航海の研究題目 外洋域および沿岸域における  
ミッシング・プラスチックの解明

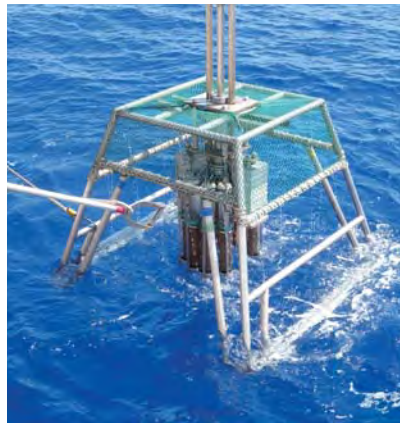
主席研究員 西部 裕一郎 海洋生態系科学部門 准教授



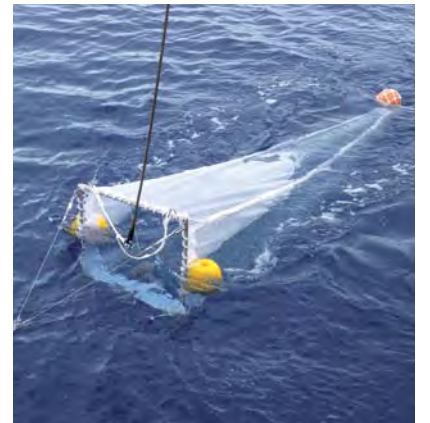
航跡図

### 【「行方不明」のプラスチックの謎に迫る】

世界の海表面に浮遊するプラスチックの量は26万トン程度であり、これまでに陸から海洋へ流出したプラスチックの総量(約2500万トン)と比べるとはるかに少ないとされています。では残りのプラスチックはどこにいったのでしょうか? 本航海では、この「ミッシングプラスチック」の謎を明らかにすべく、報告例がまだ少ない水柱や深海底の堆積物を中心にマイクロプラスチックの分布を調査しました。マルチプルコアラーや現場濾過器など、プランクトン研究者には慣れない機器も使用しましたが、新青丸の船長以下乗組員の皆さんの協力のおかげで、計画以上の観測を実施することができました。今後は、採取した試料の分析を進めるとともに、モデル研究と統合することで、海洋におけるプラスチックの動態解明を目指します。(西部 裕一郎)



マルチプルコアラーを用いた  
深海底堆積物の採取



ニューストーンネットを用いた  
マイクロプラスチックの採取

## 新青丸 KS-23-16次研究航海

観測海域 銚子沖

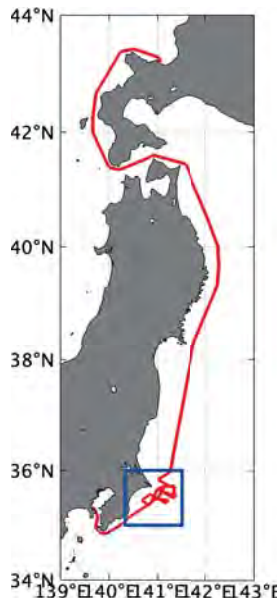
航海期間 2023年9月15日～9月22日

航海の研究題目 夏季の利根川沖陸棚上における陸起源物質の分布と輸送過程

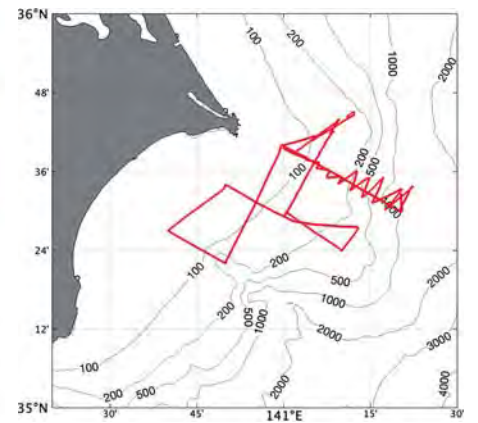
主席研究員 伊藤 幸彦 海洋生物資源部門 准教授

### 【銚子・房総沖での物理・化学・生物・地質観測】

本航海は、東京大学FSI事業「沿岸-外洋移行帯」「オーシャンDNA」「海洋プラスチック研究」および科研費学術変革領域「マクロ沿岸海洋学」の支援を受け、利根川と黒潮の影響を受ける銚子沖を主対象海域として調査を実施しました。小樽港を出港後、北海道日本海側、津軽海峡、東北～常磐の沿岸海域の海水環境を計測しながら観測海域に到達し、流速の変動を時系列で取得するための係留系の設置、CTD/LADCP・採水、乱流計VMP、マルチプルコアラー、ニューストーンネットによる観測・サンプル採集を行いました。本航海で9月半ばに銚子沖に設置した係留系は、10月に漁業者の協力で回収する予定でしたが、機器のトラブルで回収することができませんでした。その後、乗船者の皆様の尽力と、JAMSTECやAORI観測研究推進グループ、三国屋建設株式会社、ハイドロシステム株式会社の協力で、12月下旬に無事に回収することができました。関係の皆様にご感謝申し上げます。(伊藤 幸彦)



係留系投入の様子



航跡図 (左)全体、(右)観測海域拡大図

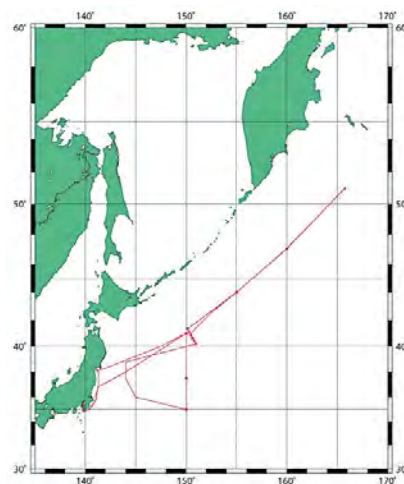
## 白鳳丸 KH-23-2次研究航海

観測海域 西部北太平洋

航海期間 2023年6月1日～6月25日

航海の研究題目 「西部北太平洋亜寒帯から亜熱帯における微量元素・同位体の循環過程の解明 (国際 GEOTRACES 計画)」(提案者:小畑元)および「高速水温計・高速電気伝導度計を用いた乱流・二重拡散過程と海洋・物質の循環の研究」(提案者:安田一郎)」

主席研究員 小畑 元 海洋化学部門 教授



航跡／測点図

## 【西部北太平洋における微量元素・同位体】

白鳳丸KH-23-2次研究航海は、西部北太平洋亜寒帯から黒潮～親潮の混合域までの海水中の微量元素・同位体の分布を明らかにするという目的で、国際GEOTRACES計画の一環として行いました。もともと2022年度に実施の予定でしたが、原油価格高騰のあおりを受け延期された研究航海の一部となります。幸い天候にも恵まれ、予定していた測点の大部分で観測を行うことができました。亜寒帯では霧に包まれた中での観測でしたが、十分なサンプリングができました。現在、陸上でサンプルを分析中ですが、近々、良い結果が得られるであろうと期待しております。(小畑 元)



霧の中で行われた大量採水 (撮影者:東京大学 大気海洋研究所 竹内 誠氏)

## 白鳳丸 KH-23-3次研究航海

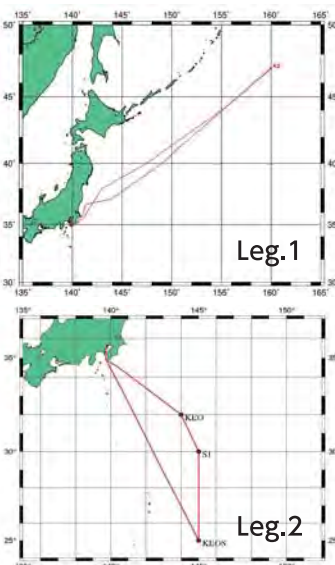
観測海域 西部北太平洋

航海期間 2023年7月2日～7月29日

航海の研究題目 西部北太平洋における大気海洋境界領域の統合研究

主席研究員 濱崎 恒二 海洋生態系科学部門 教授

航跡／測点図



## 【亜寒帯(K2)、亜熱帯(S1)定点で集中的にSML観測を実施】

本航海では、全国13の大学や研究機関から17の研究チームが参画し、大気海洋間での物質交換、生態系や生物群集の応答を観測しました。白鳳丸では、広域のトランセクト観測が多く行われてきましたが、今回は、2カ所の定点に1週間滞在することで、広域観測では難しい時系列変動を捉えることを目指しました。特に、作業艇で実施する海表面マイクロ層(SML)のサンプリングを9回も行うことができました。外洋域でこれほど高頻度にSML観測をした例はほとんどなく、本航海の大きな成果でした。また、これからの海洋学を担う若手のポストドクや学生が多く、乗組員の方々がフレッシュな顔ぶれが増えて、大変活気を感じられる航海でした。(濱崎 恒二)



作業艇によるSML観測



乗船者集合写真

# 研究航海レポート

## 白鳳丸 KH-23-5次研究航海

観測海域 南部千島海溝および日本海溝の周辺海域

航海期間 2023年9月12日～10月2日

航海の研究題目 北西太平洋の海溝域に生息する底生生物の生物相と進化過程の網羅的解明

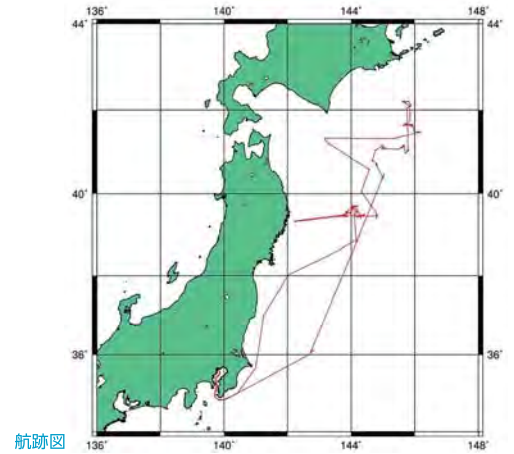
主席研究員 小島 茂明 海洋生態系科学部門 兼務教授(大学院新領域創成科学研究科 教授)

### [ 超深海生物の進化を探る(つづき) ]

油価高騰のために延期されていたKH-22-8次研究航海の後半を全国の分類学研究者やゼンケンベルク自然史協会のBrandt教授の研究グループと共同で実施しました。残念ながら当初予定されていたロシアからの参加は叶いませんでしたが海況に恵まれて、南部千島海溝10測点および日本海溝の最北部18測点と中央部1測点で底生生物の採集、襟裳海山周辺の9測点で物理環境測定、深海堆積物中の微生物およびタービダイト分布を調査するため南部千島海溝1測点と日本海溝3測点でマルチプルコアラ採泥器による海底堆積物の採集をおこないました。採集された底生生物には多くの未記載種が含まれており、系統分類(新種記載)や進化研究に活用される予定です。(小島 茂明)



観測終了後の記念撮影



航跡図



北海道沖千島海溝海溝軸(水深7300m)で多数採集されたミズムシ垂目等脚類ウミコロギスの一種 *R. herculea*。深海種が大型になる gigantism の好例

## 白鳳丸 KH-23-6次研究航海

観測海域 東北沖 日本海溝海側

航海期間 2023年10月20日～10月27日

航海の研究題目 日本海溝アウターライズにおける大規模流体循環の時空間スケールの解明

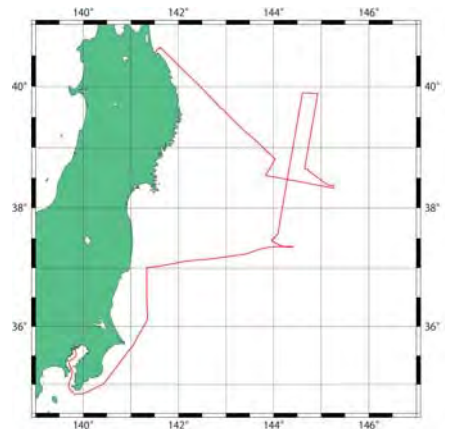
主席研究員 朴 進午 海洋底科学部門 准教授

### [ アウターライズで流体を探る ]

日本海溝海側に広がる隆起帯「アウターライズ」では、大規模な断層とマントルから上昇する流体が発見されています。このアウターライズでは2011年東北地方太平洋沖地震に連動する巨大地震が懸念されていますが、アウターライズでの巨大地震発生メカニズムに関する知見が不足しています。本航海では、アウターライズの流体循環が地震発生メカニズムに与える影響を解明するため、反射法地震探査を主体とした観測を実施しました。海況悪化により観測期間を短縮しましたが、乗船者全員の努力もあって良好なデータを取得することができました。今後は取得したデータから地殻構造イメージング、速度構造解析を進める予定です。(朴 進午)



夜半に及んだストリーマケーブルの投入作業



航跡図



乗船者の集合写真

## 白鳳丸 KH-23-7次研究航海

観測海域 久慈沖 日本海溝陸側斜面

航海期間 2023年10月31日～11月4日

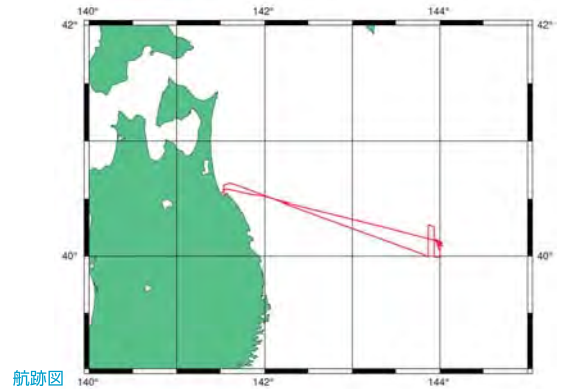
航海の研究題目 共同利用研究航海のための観測機器の性能確認試験

主席研究員 黒田 潤一郎 海洋底科学部門 准教授

### [ 共同利用研究航海の未来のために ]

白鳳丸では、年に1回観測機器類の性能確認試験のための航海を実施しています。これは、共同利用航海に使用される機器類の性能維持に欠かせない試験です。開発中の機器類の性能テストを行うこともあり、機器開発の観点からも重要です。KH-23-7次では、久慈沖の日本海溝陸側斜面のサイト(航跡図参照)で、採水器や採泥器、ネットなど様々な機器類の試験を行いました。例えば、マルチプルコアラーやグラビティーコアラーといった採泥機器については、採泥管の長さを変えたり、新しいコアキャッチャーを試したり、バルブの性能を確認したりと、様々な試験を行いました。また、深海カメラを使って採泥時の作動を確認することで、多くの知見を得ました。これらは、将来の機器類の改良や開発に役立てられます。

(黒田 潤一郎)



試験航海を終え、八戸港に帰港した白鳳丸

## 研究人生よもやま話 36

### 導きの手紙

山口 飛鳥 海洋底科学部門 准教授

私は兵庫県神戸市の出身で、中学生で阪神淡路大震災を経験しました。神戸の裏山である六甲山(標高931m)は、1000年に1回の地震で1m隆起することによって、約100万年かけて現在の高さになったと地理の授業で教わりました。まさかその数か月後に、その1000年に1回を体験することになるとは思いもよらず、そこから地球の変動に興味を持ちました。

一般家庭ではインターネットがまだあまり普及しておらず、情報源といえばほとんど書物のみだった時代です。地学関連の岩波新書を何度も読み返しました。やがて受験生となりましたが、どの大学を受験したら自分のやりたいことができるのか、受験生向けの資料にはほとんど情報がありません。思い詰めた私は、岩波新書「活断層」の著者であり、当時すでに東大地震研の名誉教授となっていた松田時彦先生にお手紙を書いて、アドバイスを乞うことにしました。

数週間後、お返事のお手紙をいただきました(写真)。大きい大学のほうが入学してから興味に応じて専門分野や教官を選ぶのが比較的容易であること、許された環境の中で自分の興味を大事にして広く地学的な考えを身につけるのが大切であること、そして推奨される進学先などが、丁寧に実直な文体で書かれていました。お返事がきたことにまず感激しましたし、「君」ではなく「あなた」という二人称で書かれていたことが、一人の人間として認めていただけたようでとても嬉しく思いました。それは私の進路選択

を決定づける、いうなれば導きの手紙でした。

それから私は、たくさんの幸運や偶然に恵まれ、少しの努力の甲斐もあってか、その手紙に書かれていた大学に入学し、そこに名前があった先生の研究室に所属し、そしてそこに書かれていた大気海洋研究所に就職しました。大学入学後に学会でお会いした

松田先生は、お手紙の印象のままの、穏やかで品のある老紳士で、私との手紙のやりとりのことを覚えてくださっていました。

あのお手紙をいただいてから四半世紀が過ぎようとしています。情報伝達的手段は大きく変わり、ホームページや広報誌さらにはSNSなどで、どの大学でどの先生がどんな研究を行っているか、誰でもすぐに調べられるようになりました。今あらためてあの手紙を読み返してみると、一介の高校生を相手に真摯に筆を執ってくださった松田先生の誠実に背筋が伸びる思いです。目の前のことにあなたはちゃんと向き合っていますか? 周りの人への敬意を忘れていませんか? 後進を育ててい

ますか? と、時を越えて松田先生にたずねられているような気がします。松田先生は2023年秋にご逝去され、直接お話をさせていただくことは永遠に叶わなくなりました。しかし、先生からいただいたあのお手紙は、これからも私の導きであり続けると思うのです。

松田先生のお手紙

山口飛鳥様

お手紙拝見しました。震災にめげずに、却って地質学に興味を持つようになった由、たいへんうれしく読ませていただきました。大学でさらにその志を発展させることを期待いたします。

さて構造地質学、とくに活断層やテクトニクスの研究に進むにどの大学が良いかのお尋ねですが、構造地質学のなかにもいろいろの分野があり、大学や教官ごとにそれぞれ特徴を持っています。大きく分けると、おもに古い岩石からなる地質構造を研究対象とする伝統的な構造地質学と、藤田先生や小生が関わっているような、新しい時代の地殻運動を扱うネオテクトニクスの分野があります。前者は岩石学や鉱物学に深く関連していますし、後者は地形学や地殻学に関連しています。全国の大学の地質学科を見渡すと前者(伝統的構造地質学)を専攻する学者や講座が多く、後者は極く少ないです。あなたの興味がいずれであっても、概して言えば、京都大学や東京大学のような大きな大学をおすすめします。入学してから興味に応じて専門分野や教官を選ぶのが比較的容易だからです。そ

分野で活躍されています。また、地震研究所や海洋研究所もあってそこで多くの大学院生が学んでいます。

いずれにしてもあなたの興味ぴったりの大学や教官に出会うことはまれでしょう。大事なことは許された環境の中で自分の興味を大事にして広く地学的な考え方を身につけることです。あなたのように直接自然の現象に興味を持つ人は貴重です。初志を大切にしてください。

これからも、何かわからないことがあったら、お尋ね下さい。ご成功を祈ります。

西南学院大学文学部

松田時彦

# Event Report

## イベントレポート



### 大気海洋研究所一般公開2023 ～空と海が教えてくれること～

2023年10月27日(金)・28日(土)に、東京大学柏キャンパス一般公開が4年ぶりに実地開催されました。大気海洋研究所でも部門展示やデジタルクイズラリー、体験プログラム、バルーンアート、ミニレクチャーなど様々な企画を用意しました。両日とも晴天に恵まれ、大海研では2日間で約6,500名のご来場がありました。

柏キャンパス一般公開「特別講演会」の原田尚美教授の講演、および大海研一般公開「ミニレクチャー」はアーカイブで視聴いただけますので、下記リンクからぜひご覧ください。

(研究交流小委員会／広報戦略室)

#### 2023 大気海洋研究所 クイズラリー

**Q1** かいようせいめいがかくぶちん しょうかい  
海洋生命科学部門からの出題  
にほん せう かい せいめい せいせく せいせく  
日本の沼や川に生息するウナギの産卵場は  
どこにあるでしょうか？

**【スタンプ獲得方法】**  
正解と番号のQRコードに  
スマートフォンのカメラを  
かざして動画をタップ

① 琵琶湖のような大きな湖  
② 利根川のような大河の河口  
③ マリアナ諸島近くの深海域

スタンプを  
つみあつめて  
きりんけんを  
もらおう！

2023年のバルーンアートのテーマは「サケの一生」  
※須原 三加氏  
(大海研出身)制作

恒例のクイズラリーをデジタル化。  
各所の展示を見ながらスマホで  
正解のQRコードをバシヤリ

■ 東京大学柏キャンパス一般公開2023 - 大気海洋研究所  
<https://www.kashiwa.u-tokyo.ac.jp/blog/departments/atomosphere-and-ocean-research-institute>



■ 30分ミニレクチャー①  
「グリーンランドの氷河と海洋のはなし」  
<https://youtu.be/zWb9tsZTDiQ>



■ 東京大学柏キャンパス一般公開2023 特別講演会「南極に魅せられて」  
<https://youtu.be/pfN2h0DCwoc>



■ 30分ミニレクチャー②  
「ウナギは深海起源だった」  
<https://youtu.be/j1VknCF-1Vc>



### 進学ガイダンス報告

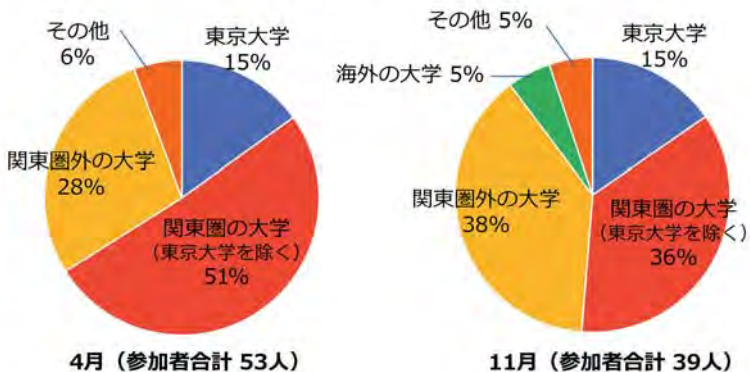
大気海洋研究所を拠点とする研究室への大学院進学を検討している方向けに、2023年4月29日(土)と11月11日(土)の2回、進学ガイダンスを開催しました。4月のガイダンスは対面(一部ハイブリッド)形式で行い、53名にご参加いただきました。対面開催の最大の利点は、研究室の雰囲気を直接体感できることであり、参加者と教員や大学院生が交流を深める貴重な機会となりました。なお、4月の参加者の約7割は、関東圏内の大学生であったため(図参照)、遠隔地の方々も参加できるよう、11月のガイダンスはオンラインで実施し、39名の方にご参加いただきました。当日は研究室の見学は実施できませんでしたが、進学準備を始めるきっかけになったことと思います。

多くの教職員や大学院生の皆さんの協力により、大気海洋研究所や各研究部門・センターの紹介資料は年々充実しています。これらの資料も活用し、対面とオンラインの双方の利点を生かして、今後もより多くの学生に大気海洋研究所の魅力を伝えられればと思います。(乙坂 重嘉)



対面開催での進学ガイダンス(4月29日)の様子

#### 進学ガイダンス参加者 所属内訳



対面開催での進学ガイダンス(4月29日)の様子

毎年恒例の卓球大会が2023年11月20日～12月15日にかけて今年度も開催されました。お昼や夕方の試合の度にエントランスホールが盛り上がっていて活気を感じていました。

参加チームは有志の応募形式ですが、今年は昨年より大幅に増えて7チームもの応募がありました(気候システム、海洋物理学、海洋化学、海洋底科学、海洋生態系科学、海洋生命科学、海洋生物資源)。対戦形式も2グループでの予選から決勝トーナメントとなり、沢山の試合が行われて所内を盛り上げてくれました。優勝を海洋生物資源部門、準優勝を気候システム研究系、3位を海洋物理学部門が飾り、忘年会の場では表彰も行われました。

参加いただいたみなさま、ありがとうございました。来年も盛況の開催となることを願っています。

(厚生委員会 永岩 修也)

## 2023年AORI卓球大会



大海研の暮れの風物詩。観客もゲームの行方に集中

所長賞	「Silhouette」(共同利用・共同研究推進室 戸田 亮二)	
「大気海洋研究所」部門	最優秀賞	「 <i>Oncorhynchus taikaisensis</i> 」(海洋生物資源部門 戸田 達也)
	優秀賞	「The clouds' language」(気候モデリング研究部門 福田 ひかり)
「海・空」部門	最優秀賞	「Reflected in Natural Mirror」(海洋生態系科学部門 菅井 洋太)
	優秀賞	「2匹のマンタとウミガメ」(海洋生命科学部門 河合 萌)
「生き物」部門	最優秀賞	「採餌中のアオウミガメ」(海洋生命科学部門 河合 萌)
	優秀賞	「すんっ」(海洋生命科学部門 松田 康佑)
「人物」部門	最優秀賞	「環」(海洋生物資源部門 樋口 富彦)
	優秀賞	「調査開始!」(海洋生物資源部門 細野 将汰)
「その他」部門	最優秀賞	「Okamoto Pier.」(海洋物理学部門 LIU Haoyan)
	優秀賞	「Dive」(海洋底科学部門 照井 孝之介)

## 2023年度AORI写真コンテスト

2023年度の写真コンテストは、「大気海洋研究所」「海・空」「生き物」「人物」「その他」の5部門にて作品募集を行いました。最終的に41点の作品が集まりました。展示は、エントランスホールとWEBの両方で行いました。2023年12月18日のAORI忘年会にて各賞の発表と表彰をもってコンテストも無事終了しました。作品を応募いただいた皆様、コンテスト運営にご協力いただきました多くの方々に、この場をお借りして御礼申し上げます。(厚生委員会 井上 潤)  
**※受賞作品は表紙でご覧ください。**

## 大気海洋研究所忘年会・ミニコンサートの開催

2023年12月18日(月)に所内の忘年会が開催されました。今回は2019年以來の対面開催となり、100名を超える参加がありました。第一部のミニコンサートでは、AORI音楽サークルによる管楽アンサンブル演奏から始まり、「515」によるギター演奏、「AORI HULA」によるフラダンスが披露されました。2020～2022年まではオンライン配信がメインでしたが、今回は多くの方が会場へ足を運んでくださり、美しい演奏に聴き入り、表現力豊かなダンスに引き込まれました。

第二部の忘年会では、エントランスにお寿司、ローストビーフ、サラダ5種盛り、ピザなど各種料理が用意され、ワインやビールなどのお酒も提供されました。所長のご挨拶から始まり、写真コンテスト、卓球大会の表彰と続き、学生さんやスタッフの皆さんの笑顔で溢れた素晴らしい会になりました。今回も関係者の皆様のご協力に感謝します。2024年も皆様にとって素晴らしい一年になることを願っています。(厚生委員会 漢那 直也)



1



2



3



4

- ①「515」によるギター演奏
- ②「AORI HULA」によるフラダンス
- ③写真コンテスト「所長賞」発表の瞬間
- ④卓球大会優勝チーム、海洋生物資源部門への賞状授与



**Radionuclides in the Marine Environment:**  
Scientific view on the Fukushima Dai-ichi Nuclear Power Station Accident  
by 7 oceanographers

青山 道夫・猪股 弥生・柳山 秀樹・熊本 雄一郎・乙坂 重嘉・立田 稔・津旨 大輔(著)  
B5判・370ページ・23,000円(税別)  
2023年5月・筑波大学出版会 刊  
ISBN : 978-4-904074-76-3

2011年3月に発生した福島第一原発事故では、事故由来の様々な放射性核種が環境中に放出された。福島周辺海域では、ほぼ全ての海産魚類について出荷制限が解除され、着実に復興が進んでいる一方で、同原発施設内に貯留しているALPS処理水の海洋放出が開始され、まだ多くの課題を残している。本書では、海洋を主な研究フィールドとして活躍する7名の著者が、主に事故後の10年間に国内外で発表された300編を超える論文をレビューし、得られた知見に新たな解析結果を追加して議論を重ね、海洋における事故由来の放射性核種の動態について、海水、堆積物、生物、モデルなどの分野に分けて科学的に総括する。

丸善出版(発売元) - Radionuclides in the Marine Environment  
https://www.maruzen-publishing.co.jp/item/b304954.html



**地球規模の気象学**  
大気の大循環から理解する新しい気象学

保坂 直紀(著)  
新書判・266ページ・1,210円(税込)  
2023年11月・講談社 刊  
ISBN : 978-4-06-530092-3



大気の大循環を支配する物理を基礎から説明し、だが教科書臭はしないように——。編集者からの注文は無理難題に思えた。自分がかつて気象学を学んだとき、数式を扱うことに慣れてしまい、じつはわかっていないのにわかったつもりになっていた点はどこだったのか。それを数式なしに言葉で説明しよう。コリオリの力や地衡流の基本を書いた前者『謎解き・海洋と大気の物理』の応用編として、ロスビー波を中心に、流れの不安定、非線形性、初期値依存などを、最近の実例を交えて扱った。研究者の道を志さない人でも、大循環に思いをはせたとき、そこに物理が見えるようになったかどうか。それは読者の判断にお任せするしかない。

講談社BOOK倶楽部 - 地球規模の気象学  
大気の大循環から理解する新しい気象学  
https://bookclub.kodansha.co.jp/product?item=0000371643



**國吉 優太**

気候変動現象研究部門  
(大学院理学系研究科 地球惑星科学専攻)博士課程  
日本地球惑星科学連合2023年大会 学生優秀発表賞  
[2023年5月]  
発表題目: Hydrological change in millennial-scale glacial climate variability and its impact on the Atlantic meridional overturning circulation



**太田 映**

海洋底科学部門(大学院理学系研究科 地球惑星科学専攻)修士課程  
日本地質学会 第130年学術大会 学生優秀発表賞 [2023年9月]  
受賞題目: 根室層群における白亜紀—古第三紀境界のオスミウム同位体層序



**道田 豊 教授**

国際連携研究部門  
Techno-Ocean Award  
[2023年10月]



**高藪 緑 教授**

気候変動現象研究部門  
日本気象学会2023年度 藤原賞 [2023年10月]  
業績: 熱帯・中緯度域の雲降水システムの大規模な組織化に関する先駆的研究ならびに衛星気象学・気候学の発展への貢献  
※本誌p.09参照

**松岸 修平 特任研究員(ほか)**

海洋物理学部門  
HPCI利用研究課題優秀成果賞 [2023年10月]  
課題名: 全球大気ラージエディ解像シミュレーション



**中島 映至 名誉教授**

令和5年秋の叙勲「瑞宝中綬章」  
[2023年11月]  
功労概要: 教育研究功労



**吉岡 純平**

海洋底科学部門  
(大学院理学系研究科 地球惑星科学専攻)博士課程  
第9回地球環境史学会年会 優秀発表賞 [2023年12月]  
発表題目: 中新世の海水Ge/Si比変動の高解像度復元

**吉澤 晋 兼務准教授**

(大学院新領域創成科学研究科 准教授)  
海洋生態科学部門  
(大学院新領域創成科学研究科 准教授)  
日本微生物学連盟「野本賞」 [2023年12月]  
業績の題目: 海洋微生物の新しい光エネルギー利用機構の解明

**猪股 一馬**

気候変動現象研究部門  
(大学院理学系研究科 地球惑星科学専攻)修士課程  
日本気象学会 2023年度秋季大会 松野賞  
[2023年12月]  
発表題目: 熱帯域におけるCongestusの降水と環境との関係性について

**中島 壽祝 学振特別研究員**

海洋生物資源部門  
岩手県三陸海域研究論文特別賞 [2023年12月]  
論文タイトル: 三陸沿岸海域への栄養塩輸送経路としての地下水湧出に関する研究

**新野 宏 名誉教授**

令和5年度(第65回)交通文化賞  
[2024年1月]  
功績概要: 防災気象情報を大きく高度化させる方向性を示すとともに、国民の防災意識の変革に尽力するなど気象業務の発展及び国民の安全・安心に寄与した



**高藪 緑 教授**

気候変動現象研究部門  
THE JOANNE SIMPSON TROPICAL METEOROLOGY RESEARCH AWARD [2024年1月]  
授賞理由: For innovative use of satellite observations and international leadership in establishing key tropical precipitation satellite missions to advance understanding of tropical precipitation variability  
※本誌p.09参照

**孫 語辰**

海洋底科学部門  
(大学院理学系研究科 地球惑星科学専攻)博士課程  
第40回有機地球化学シンポジウム 学生優秀発表賞  
[2023年8月]  
発表題目: アミノ酸の異性体レベル同位体比分析の新たな方法と展開



**飴井 佳南子**

海洋生態科学部門  
(大学院農学生命科学研究科 水圏生物学専攻)博士課程  
日本プランクトン学会 学生優秀発表賞  
[2023年9月]  
受賞題目: 分子生物学的手法による浮遊性多毛類オゴコカイ科の全球的な種多様性解明



**上原 峻**

海洋生命科学部門  
(大学院理学系研究科 生物学専攻) 修士課程  
The 29th Japanese Medaka and Zebrafish Meeting Best Presentation Award  
[2023年9月]  
受賞題目: Identification of Cholecystokinin as the Second Gonadotropin-Releasing Hormone in Medaka



**人事異動一覧** \*R5.10~R6.2

\*特任研究員、学術支援職員、技術補佐員、事務補佐員については省略

□ 教員(常勤)

発令日	氏名	異動内容	所属・職名	旧所属・職名
R6.2.1	平井 惇也	昇任	海洋生態系科学部門 講師	海洋生態系科学部門 助教

□ 特定有期雇用教職員

発令日	氏名	異動内容	所属・職名	旧所属・職名(本務所属・職名)
R5.12.1	前田 歩	採用	附属国際・地域連携研究センター 特任助教	

□ 外国人客員教員

委嘱期間	氏名	所属・職名	本務先・職名
R5.11.1~R6.2.1	SECOR DAVID HALLOCK	海洋生物資源部門 客員教授	米国メリーランド大学チェサピーク生物学研究所・教授

